

聞名仁教

第78号
(発行日)
2017年3月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)
63-4488
(発行人) 土井紀明
mail:bachkantata2mubansou@zeus.onet.ne.jp
http://nenbutsuji.info/

《 聞法会ご案内 》
○ 〈同朋の会〉
毎月22日 午後2時始。
○ 〈念仏座談会〉
毎月2日と12日 午後3時始
○ 〈聖典学習会〉
毎月6日 午後7時始。
○ 〈真宗入門講座〉
毎月18日 午後6時30分始。
* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

宗教心にゆり起こされて

宗教心はだれでももっている心だといわれています。〈宗教なんかに関係が無い〉と思っ
ている人でも宗教心はありま
しょう。

なぜなら宗教心とは、端的に
言えば無限なるまことを求
める心であり、あるいは永遠
のいのちを求める心だからで
す。

ただ皆が皆それを自覚してい
ないだけではないでしょう
か。私たちに長生きがしたい
という欲求があることは容易
に感じられます。しかし、私
たちのいのちの底にあるのは
長生きよりもむしろ〈死なな
いのち〉を求めていると思
います。ただそういう欲求が
あっても心の底に埋もれてい
るか、初めからあきらめてい
るのではないのでしょうか。

宗教心を自覚していない場
合もある一方で、家庭のお内
仏(仏壇)やお地藏さんや神
社にお参りして手をあわせる
ということもしばしば行われ
ています。これは宗教心の表

れともいえませんが、しかしな
がらそれはかならずしも宗教
心その人の上に露わになっ
ているとはいえませんが。たと
えば正月に初詣をするからと

いって、必ずしも宗教を求め
てはいません。あるいは家族
のものが重い病気にかかって
近くの神社に回復祈願のお百
度参りをしたからといって、

それは宗教を求めているとは
必ずしも言えないですね。そ
の証拠に病気が治るとか病人
が死んでしまうと、もうお参
りも拝みもしなくなる場合が
多いですから。

宗教心、それが自分の意識
の上に表れてしかも離れなく
なつて、どうしてもそれを解
決したいと思うようになりま
すと、それは宗教心が自覚的
になったということでしょう。

その宗教心は、人によつて
その現れ方は違いました。が、
宗教心そのものは、清沢満之
師の言うように「人心の至奥
より出ずる至盛しじょうの要求」とい
えましょう。人間の最深の根

本欲求で
ありま
す。

宗教心がどのような形で人
の意識の上に露わになつてく
るかは多様ですが、たとえば
大変優れた思想家だった滝沢
克己先生(一九〇九〜一九八
四)がご自身の回想の中で、

中学一年の時、学校から六
キロの道を重いカバンを肩に
かけて白い、埃ほこりっぽい日光街
道を歩いて帰っていた。この
道で、今もはっきりと眼にう
かぶ一つの光景がある。暑い
日照りの午後、私はどうして
かたった一人で、とぼとぼと
その道を帰りつつあった。道
ばたの小川で、年とつた農夫
が小さな水車を踏んで、それ
に取り付けた箱の中の芋いもかな
にかを洗っていた。と、不意
に、私の心の中に奇妙な考え
が浮かんだ。

「あのお爺さんは、結局の
ところ何のために、あんなに
して際限もなく、水車を踏ん

《念佛寺永代経法要》

四月二十二日(土)

午後二時始

法話 渡邊 愛子 先生

*同日(四月二十二日)午前十時・勤行法話

(念佛寺住職の法話です)

でいるのだろうか？」

すると、それがまたいつの
まにか、そのお爺さんだけの
ことではなくて、いまこうし
て歩いている自分自身のこと
になつていったのだ。

そのときはさして気にもと
めなかつたが、それ以来、こ
の奇妙な問いは、私に取りつ
いてはなれなかつた。のみな
らず、時とともにだんだん濃
く、私の骨身に浸しみみてくるば
かりだった。(滝沢克己「読解
の座標」九六頁)

と言っています。これなどは
日常的に見る何でもない光景、
その光景がそのまま「あなた
は結局のところ、この人生で
何をしているのか」と問うて
いる。その光景は、人生の根
本を問われるような事として
滝沢少年は自分に問うたので
す。

この年老いた農夫は芋を洗

妙土広大超数限

(和讃問答)

妙土広大超数限

本願莊嚴よりおこる

清浄大摂受に

稽首帰命せしむべし

現代語訳

(阿弥陀如来の真実報土は、

広大無辺際で数量を超え、数量で表すことのできない世界

である。この浄土は、阿弥陀如来の本願力によってできあ

がっている。その浄土は、清浄であるとともに一切衆生を

受け入れていく世界である。このような浄土を建立された

阿弥陀如来に、礼拝帰命したてまつれ)

(語句)

妙土——妙は、美しい、よい、奥深いなどの意味で、妙

土とはすぐれた世界という意味。阿弥陀仏のお浄土のこと。

* * *

D「このご和讃は曇鸞大師が制作された『讚阿弥陀仏偈』

の中の一節、

妙土広大にして数限を超ゆ。

自然の七宝をもつて合成するところなり。

仏の本願力より莊嚴起る。

清浄大摂受を稽首したてまつる。

というのを聖人がそのまま歌にされたものです」

N「(妙土広大超数限)をどう受け取らせていただいたらよろしいですか」

D「妙なる世界である浄土は数量ではかることのできないほど広大で無量無限な領域だといわれるのです」

N「これはどういうことを言おうとされるのでしょうか」

D「一つには、十方のあらゆる世界から浄土に生まれる衆生は多いといわれていますから、極楽浄土はいつかは窮屈

になったり満杯になったりしないかという懸念が起りま

す。けれどもお浄土は無量無辺の世界であるゆえ、そういう心配はない、という意味があります」

N「他にはどういう意味がありますか」

D「実は、数量の限定を越え

うな問いはいつでもだれでもの上に起りうる問題であり、万人の人生の底に潜んでいる問いでありましょう。それをなんとか解決したいというのつびきならぬところに宗教心が躍動していると思います。

もちろんこのような問題に

対して滝沢先生のように思惟

を尽くしきつてそのあげくに、

突然に解決されたといわれる

ような道程を私たちが同じよ

うにたどることは難しいと思

います。

ではこうした難問に対して

真宗は、どう応えているので

しょうか。それは、南無阿弥

陀仏とまず称え、称えながら

南無阿弥陀仏のいわれをよく

聴聞していく。そこに、南無

阿弥陀仏がこうした問いにす

でに答えて下さっていたこと

が知られてくるのであります。

我が心に宗教心が起り、人

生そのものが問題となるのも、

真実そのものからの波動を受

けて起こるのであり、起こつ

た問題にすでに応えていて下

さっているのも真実なのであ

りましょう。その真実を南無

阿弥陀仏のお念佛において、

知らされ、であわせていただ

くのであります。

うな状態になったといいま

す。ところが二十三歳のある

日、

「そのようなある日、前の広

つばをぐるぐる回りながら考

えているうちに、突然、『ああ、

こういうことだ、先生(西田

幾多郎)はこのことを言っ

ておられるのだ』とわかつて

きたことがあるんです。そん

な場合、禅の方ではよく何月

何日に開眼したというような

ことをいいますが、そういう

ふうには日付までははっきりと

覚えていないわけではないので

すが、とにかく以前はまるで

取っつきようのなかったもの

が、『ああ、ここだ』というふ

うに、はつきりしてきたこと

があるのです。」「(現代におけ

る人間の問題)」

と回想しています。であうべ

き真実にであったのです。

滝沢先生の歷程は宗教心の

展開の事例ですが、宗教心

は人生そのもの、私そのもの

が問いとなる、そういう質の

問題であり、その問いは決し

て特殊なだれその問題では

なく、人である限りその人の

足下に問われている問題であ

ります。滝沢少年が発したよ

うな問いはいつでもだれでも

の上に起りうる問題であり、

万人の人生の底に潜んでいる

問いでありましょう。それを

なんとか解決したいというの

つびきならぬところに宗教心

が躍動していると思います。

もちろんこのような問題に

対して滝沢先生のように思惟

を尽くしきつてそのあげくに、

突然に解決されたといわれる

ような道程を私たちが同じよ

うにたどることは難しいと思

います。

ではこうした難問に対して

真宗は、どう応えているので

しょうか。それは、南無阿弥

陀仏とまず称え、称えながら

南無阿弥陀仏のいわれをよく

聴聞していく。そこに、南無

阿弥陀仏がこうした問いにす

でに答えて下さっていたこと

が知られてくるのであります。

我が心に宗教心が起り、人

生そのものが問題となるのも、

真実そのものからの波動を受

けて起こるのであり、起こつ

た問題にすでに応えていて下

さっているのも真実なのであ

りましょう。その真実を南無

阿弥陀仏のお念佛において、

知らされ、であわせていただ

くのであります。

うな問いはいつでもだれでも

の上に起りうる問題であり、

万人の人生の底に潜んでいる

問いでありましょう。それを

なんとか解決したいというの

つびきならぬところに宗教心

が躍動していると思います。

もちろんこのような問題に

対して滝沢先生のように思惟

を尽くしきつてそのあげくに、

突然に解決されたといわれる

ような道程を私たちが同じよ

うにたどることは難しいと思

います。

ではこうした難問に対して

真宗は、どう応えているので

しょうか。それは、南無阿弥

陀仏とまず称え、称えながら

た無量に広い領域である浄土、それに比べてこの世は、いろいろなところで数に限りがあります。それゆえ、それが原因でさまざまな困難や苦しみが起こるといふことでしょう。浄土はそういう困難のない広大な領域だと仰せられるのでしょうか」

N「この世ではいろいろな場面で数量に限界があつて、そこに困難があるといわれますが、どういふことがありますか」

D「たとえば、最近の例ですと、一国に住む自国民にとつて、外部から入ってくる人があまり増えてくると窮屈になり、トラブルが発生しやすくなりますね。最近の例では、フランスでもドイツでもアメリカでも移民や難民を受け入れ続けると、国民の住環境や職場や福祉費用などで、住民が圧迫されるという不安が出てきてますね。それで移民や難民の受け入れに対して反対運動が起こり、対立や排斥、そして衝突が起こつてきてます。難民は自国の内部紛争や弾圧による生命の危機から逃れてきた人たちですから、当然人道的に受け入れるべきですが、受け入れ先の国民は入ってくる人の数が増えてくる

といういろいろな面で問題や圧迫を感じて排斥をするようになります」

N「老人ホームでも入りたくても空きがなくて、待たされるという話もよく聞きますね」

D「そういう風で、この世の様々な場所では数に制限をされて、それがために困つたり争つたりすることが多いですね。しかるに浄土はどれほど入つて（往生して）も数に制限がなく、往生人のすべてを受け入れて下さるといわれるのではないのでしょうか」

N「浄土に往生する衆生の数がどれほど多くても浄土は窮屈にならない、それどころか数限りなく受け入れることのできる徳が阿弥陀仏の浄土にはあるということですが、それはなぜなのでしょうね」

D「それは有り難い不思議なお徳と言ふしかありませんが、こういうことも言えますよう」

N「それはどういふことですか」

D「有名な念仏聖であつた一遍上人のお言葉に、
阿弥陀の三字を無量寿といふなり。

この寿（いのち）は無量常住の寿にして不生不滅なり。すなわち一切衆生の寿命なり。

無量寿は不生不滅にして常住であり、一切衆生の寿命となつている、とあります。このことからいいますと、私たち生きとし生けるもののいのちの寿命無量なる阿弥陀仏のいのちの外にはないと言ふこととです」

N「私たちははかり無いのちの中の一粒子のいのちなのですね」

D「ええそういつてもいいと思います。阿弥陀仏のいのちの外に私たちのいのちは無いわけですから、阿弥陀仏のいのちの領域である浄土に生まれると言ふことは衆生がどこか違ふところに生まれるといふことではなく、阿弥陀仏のいのちに自分のいのちが帰る、あるいは自分のいのちだといふかんでいたのを離す、ということになるでしょう」

N「私たちは、阿弥陀仏のいのちの中で生まれて生き、かつ死ぬということなのでしょうか」

D「そういえるのだと思いません。たとえて言えば、一切衆生のいのちは、大海の上のさまざまな小さな波や渦のようなもの。ですから波が生まれたり消えたりすることは大海から現れたり元に戻るようなものでしょう。ですから海水

としては増えもし減りもしない（不増不減）です。お浄土は往生人の数のいかによつて増えもし減りもしない」

N「そうするとこの世で亡くなつて浄土に生まれる、といつても浄土に何か別のものが加わつて増えるということではないのですか」

D「そうですね。浄土は寿命無量の領域といわれていますから、その中の小さな私たちのいのちも浄土のいのちの外にないわけですから、どれほどの数のものが浄土に生まれても、浄土そのものは増えもし減りもしないといえましょう」

N「では一切衆生はみな、死ねばすべて無量寿なる浄土に帰るのですか」

D「それは簡単にいえません。たとえ私たちそれぞれのいのちは無量寿のいのちの外にはないとしても、それをそうと（知る）（気がつく）（さとる）といふことが無ければ、いつまでも波のような有限ないのちを自分だと執着する迷い（有身見）があり、それがあつたあるいは残る間は、また小さな波のようないのちを我とし我が身としてつかんでしまうのではないのでしょうか。いわゆる生死するいのちを自己ととらえてしまうのでしょうか」

こうして生死を繰り返してしまふと説かれています」

N「そうすると私たちは無量寿なる阿弥陀如来様に気がつく、いわばであうといふことがとても大切なのですか」

D「ええ、まさにその通りです」

N「であうには、お念仏をいただくのが私たちの道なのですね」

D「ええ、そうですね。私たちは南無阿弥陀仏を称え聞く。そのことにおいて、阿弥陀仏が私のいのちの主体であることを知らしていただくのです」

N「南無阿弥陀仏を称え聞くことにおいて、阿弥陀仏が私たちのいのちの親であると知らせていただくのですか」

D「ええそうですね」

N「お念仏を聞くとはそういう意味をもっているのですか」

D「ええ、南無阿弥陀仏は無量寿なる阿弥陀仏が（汝をだいて）いる、汝を引き受けてい、汝を助ける」と喚んで下さつてお姿なのです」

N「その南無阿弥陀仏の喚び声に喚びさまされるのですか」

D「ええ、そうですね。ただ喚びさまされるといつてもほのかにですが（少なくとも私には）。しかしほのかでもお知らせいただいた、それをその都

度お知らせいただくのは大変有り難いことです」

N 「では次に（本願莊嚴よりおこる）とはどういうことなのでしようか」

D 「莊嚴は（しようごん）と仏教では読み慣わしています。もともとの意味は（かざる）ということですよ。かざるというのは、あるものの意味とか意義とか功德というものを、それを見たり聞いたりする人に露わとするためにかざりますね。たとえば結婚式をするときに、その場所を花や敷物や電飾などでかざりますね。そうすることによって結婚式がめでたいものであり嚴肅なものであり喜ばしいものであることが、そこに参加する人に感じられます」

N 「よくお仏壇をおかざりするといえますね」
D 「ええ、それも同じです。もしお内仏（仏壇）の中に阿弥陀仏の絵像だけしか正面にかかっているなら、阿弥陀仏の尊さはそれを拜む人にはたいして感じられません。花でかざり壁を金箔でかざり、彫刻でかざるなどをする事によって、阿弥陀仏を拜む私たちが自然に尊くありがたい感じになって頭がさがるので

しよう」

N 「本願莊嚴ということですが、何をかざるのですか」

D 「ありのままの真実そのもの、それを仏教では（真如）と申します。その真如をかざることによって真如の徳が私たちに露わとなって下さるのです。真如をかざることによってその徳が私たちに露わとなつてくださった相、それが阿弥陀仏の浄土（如来）です」

N 「真如という真実ありのままがかざられて、その功德が私たちに具体的に表われて下さるのですね。どのようにするのですか」

D 「それは阿弥陀仏の本願とその成就によって私たちに真如の徳が与えられるのです。真如からあらわれた法蔵菩薩の願行成就の本願のお力によって、真如から如来浄土が一切衆生に開かれたのであります。そういう意味で（本願莊嚴よりおこる）といわれるのであります。如来法蔵様の思惟と願と修行——それを莊嚴行といえます——によって、浄土が私たち凡夫に開かれ、如来の功德が与えられるのだと大無量寿経に積尊は説かれています」
N 「ではなぜ真如が如来法蔵

様によってかざられねばならなかつたのですか」

D 「それは、私たちが迷いの凡夫であつて、凡夫の力や行いによつて真如の徳を発見し、その徳をいただくことができないからです。それほど凡夫は愚かであります。そしてまた如来法蔵様は大変憐れみ深いお方だからです」

N 「如来法蔵様は憐れみ深いお方だと言ふことですが、どのようにに憐れみ深いのですか」
D 「凡夫では真実を見いだし、それを得ることができないと如来法蔵様はごらんになつて莊嚴行をなされ、そのご苦労の結果をお与え下さることによつて浄土が私たちに開かれ、（我が浄土に生まれてくれよ）とおすすめに成り、浄土に生まれる行としてお念佛を与えて、一人一人に喚びかけて下さるのです」

N 「真如から、万人を救う阿弥陀仏のお徳として露わになつて下さつたのですね」
D 「ええそうです。阿弥陀仏（浄土）のお徳は基本的には寿命無量であり光明無量の徳であり、それがさらにさまざまに現れてはたらい下さいます。その一つが次の（清浄大摂受）というお徳です。浄土（如来浄土）は

私たちに清浄大摂受というはたらきをして下さつているといわれるのです」

N 「では清浄大摂受とは」
D 「如来浄土はそれ自身が全く清浄でありつつ、罪業深い私たちをこのままなりで受け取り、浄土に生まれさせ浄化（清浄化）して仏にして下さるという不可思議な有り難いお徳のことです」

N 「まことに煩惱の塊である私をこのままを受け入れて浄化して下さるほどに大いなる慈悲の受容者が如来浄土なのです」

D 「ええ、だからその如来浄土を（稽首帰命せしむべし）で、頭を下げて帰依し帰命したてまつれ、と仰せになるのです」（了）

【遠方法話予定】

*三月四日。福井別院。午前十時。法話座談

*三月十七日。名古屋市。高畑開法会館。午前十時。法話座談

*四月十五日から十六日。広島市。龍善寺。

午後から午後まで。

*五月十九日から二十一日。福井別院。午後

から午後まで。法話座談。

*五月二十六日。名古屋市。高畑開法会館。

午前十時。法話座談。

（詳しくは念佛寺にお尋ね下さい）

お便り

聞法念仏者Aさんからの便り

* * *

選択本願、即ち、全ての有情を必ず浄土に往生せしむる為に選びとつて下さつた称名念仏、そのものが本願だと思います。憑むとは、自分を見限ることとお言葉、本当にそうだなあと感じました。

でも、一方でこうも思うのです。「そう簡単に自分をまかせられない」とも。何らかの形で自らの限界性を知らしめられ、そこで初めて「念仏申さんと思い起つところ」が立ち上がってくる。その時に至るまで、そして今に至るまでどんなご縁があつたのだろうと思うのですが、全く分かりません。ある方が教えて下さいました。「助からないまま助けられる教えだから、大変なことですよ」と。故に何も分からぬまま、「我が名を称えよ、必ず救う」の仰せに随順いたします。引き続きよろしくお願ひします。（了）

